



## 3年に1度の国際芸術祭 「あいちトリエンナーレ」

8月11日から74日間繰り上げられる国内最大級の国際芸術祭「あいちトリエンナーレ」。3年に1度の祭典が開幕し1カ月が過ぎました。第3回のテーマは「虹のキャラヴァンサライ 創造する人間の旅」。第1回は「都市」、第2回は「大地」をテーマとしており、今回はストレートに「人間」に焦点を当てています。「キャラヴァンサライ」とはシルクロードを旅する隊商の宿泊所。異国のモノや歌、踊りが繰り上げられる休息と交換の場所でした。あいちトリエンナーレに、国内外から人や作品が集い、共有する「創造の旅」が生まれれば——。愛知を「芸術におけるキャラヴァンサライ」にしたいと考えています。

今回、名古屋と岡崎に加え、豊橋が会場となりました。あいちトリエンナーレを訪れる皆さんが、愛知県内を巡りながら、土地の魅力を発見する。そんな体験をしていただけたらと思います。私自身、写真家として世界を旅しながら、制作とともに映像人類学の研究を続けており、そうした視点も盛り込んでいます。

## 世界から多様な119組が集結

あいちトリエンナーレの特色は、現代美術、映像プログラム、ダンス、パフォーマンス、オペラと、芸術活動を「複合的」に扱っていることです。今回は、世界38の国と地域から119組のアーティストが集まりました。国際展にブラジルやトルコを拠点とする若手キュレーターを起用したことで地域性が拡がり、中南米や中近東など、日本では紹介されることが少ない作家たちも出展しています。アートの枠組みを越境する新たな試みもあります。その一つがディアンドデパートメントプロジェクト。ロングライフデザインの観点から1つの県を扱うガイドブックを制作しており、本展では「愛知」号の研究の過程と結果を紹介しています。

# 国内外から人と作品が集い 共有する「創造の旅」



トリエンナーレで上演される、フランスのフィリップ・ドックフレ演出によるカンパニーDCAのパフォーマンス『CONTACT』

## 親子で現代アートに触れる

普及・教育プログラムにも力を入れています。愛知芸術文化センター内に「アートティーチング・トイ」を設置。これはアメリカの教育者ビクトル・ダミコが考案した装置で、遊びながら色や物や形に触れることで、展覧会鑑賞の導入になります。他にも、用意された材料を使って制作する「キャラヴァンファクトリー」や、さまざまな素材や色の紐を縦横無尽に結び、広げていくジョアン・モデの《Net Project》など、親子で現代アートを体感できる機会を多く提供しています。

## 愛知をアピールする取り組み

「あいちトリエンナーレ2016」では、テーマカラーを「イエローオーカー」に設定しました。イエローオーカーは人類が芸術を始めたとき最初に使った色と言われています。この色が豊かに残っているのが愛知県。本展には、陶芸作家として地元出身の柴田真理子が参加しており、作陶が盛んな愛知とのつながりも感じていただけるのではないのでしょうか。さらに最先端のデジタルファブリケーション技術を使った作品が並ぶ「ツクロッカ」も「あいちトリエンナーレ2016」ならではの。愛知は、ものづくりが非常に盛んな地域。山と海の文化とともに、産業都市としての顔も持っています。多様性という愛知の魅力を知っていただけたらと思います。



あいちトリエンナーレ芸術監督  
港 千尋さん

みなと ちひろ / 昭和35年神奈川県生まれ。写真家・著述家。多摩美術大学美術学部情報デザイン学科教授(映像人類学)。群衆や記憶など文明論的テーマを持ち幅広く活動。「記憶—創造と想起の力」(講談社)でサントリー学芸賞。平成18年に釜山、平成24年に台北でビエンナーレの共同キュレーター。平成19年にヴェネツィアビエンナーレ国際美術展日本館のコミッションナー。